

【Advanced II】

筆記試験 <理論> 例題集 ①

(90分)

I. 次の楽譜を見て、各問に答えなさい。

1. ①～⑧にあてはまるコード・ネームを書きなさい。テンションも記入すること。

① _____ ② _____ ③ _____ ④ _____
 ⑤ _____ ⑥ _____ ⑦ _____ ⑧ _____

2. [A]～[E]のコードの度数と機能を書きなさい。

(注) 機能の表示は以下の略号で答えなさい。

Tonic → T Dominant → D Subdominant → S
 Subdominant Minor → Sm Secondary Dominant → Sec.D
 Sub Secondary Dominant → Sub Sec.D

	度数	機能
A		
B		
C		
D		
E		

3. (ア) ~ (エ) のコードに対する適切なアベイラブル・ノート・スケール名を書きなさい (開始音名も記入すること)。

(ア) _____ (イ) _____
 (ウ) _____ (エ) _____

●コード判別、コードの度数と機能、アベイラブル・ノート・スケールに関する問題です。Advanced II では、ノン・ダイアトニック・コード (代理コードやセカンダリー・ドミナント) を含めた各種のコードの判別と、コードに含まれるテンションの度数を答える必要があります。テンションの度数はコードのルート基準に割り出すことができますが、それだけではなく、「そのコードに使用可能なテンション」であるかどうかを含めた、総合的な理解が望ましいところです。

さらに、それらノン・ダイアトニック・コードの機能、コードの種別に対応したアベイラブル・ノート・スケール (ドミナント7thコードにおける複数のスケールを含む) についても把握しておきましょう。

(正解) 1. ① C#m7(b5) ② F#7(b13) ③ Am7(11) ④ D7(13) ⑤ Gmaj7(9) ⑥ Dm7(9,11)
 ⑦ Cm7(9) ⑧ E7(#9,#11)

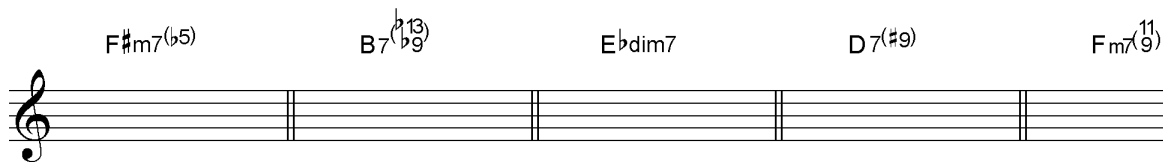
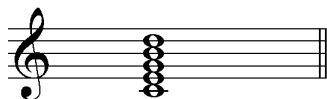
2.

	度数	機能
A	III m7	T
B	IV maj7	S
C	^b VII 7	Sm
D	II m7	S
E	^b II maj7	Sm

3. (ア) E ハーモニック・マイナーP5 ↓スケール (イ) G コンビネーション・オブデイミニッシュ・スケール
 (ウ) B フリジアン・スケール (エ) D ミクソリディアン・スケール

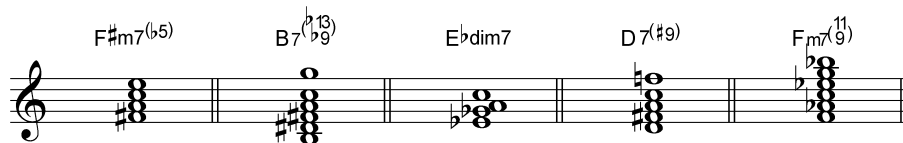
II. 例にならって、次のコード・ネームの和音の基本形を書きなさい。

(例) Cmaj7(9)



●Advanced II では、テンションも含めたコードの構成音を問われます。ここでも、コードとテンション・ノートの関係についての理解が必要になります。

(正解)



Ⅲ. 次の曲を、1～2小節の例に続けて、3小節目以降をリハーモナイズしなさい。コードの数は必要に応じて増やしてもかまいません。

〈オリジナル〉

〈リハーモナイズ〉

●原曲のコードをリハーモナイズする問題では、メロディーに合い、曲の流れとしても自然なコード付けをすることが求められます。リハーモナイズは、元のコードの代理コードの使用、ドミナント・コードのトゥー・ファイブ等への分割、さらにセカンダリー・ドミナントの付加といった方法を使うのが一般的です。（これらについては、『ピアノ・パフォーマンス 4<改訂版>』4章（61ページ～）で詳しく解説されています。）
正解は一つではありませんので、いろいろな可能性を試みながら、メロディーとの相性に注意してまとめていきましょう。

(解答例) 〈リハーモナイズ〉

IV. 下の表は、ノン・ダイアトニック・コードの度数と機能について書かれたものです。例にならって表の空欄をうめなさい。

(注)機能の表示は以下の略号で答えなさい。

Tonic→T Dominant→D Subdominant→S
 Subdominant Minor→Sm Secondary Dominant→Sec.D

Key	度数	コード・ネーム	機能
例 C	^b VII ^{maj} 7	B ^b maj7	S
E	V7/II		
F		D ^b maj7	
D ^b	^b VII ^{maj} 7		
	^b II7	B ^b 7	
	V7/III	B7	
G	^b VI7		
A ^b		G ^b 7	
B		Fm7 ^(b5)	
E ^b		Emaj7	
D	V7/VI		

●ノン・ダイアトニック・コードの機能についてのまとめです。各種の代理コードやセカンダリー・ドミナントについて、キーと度数の関係、およびその機能を網羅的に把握しておくことが必要です。これらに関しては『セオリー・オブ・ポピュラー&ジャズ 2』第5章、特に代理コードの機能については30ページの表をしっかりと頭に入れておくと良いでしょう。

(正解)

Key	度数	コード・ネーム	機能
E	V7/II	C [#] 7	Sec.D
F	^b VI ^{maj} 7	D ^b maj7	Sm
D ^b	^b VII ^{maj} 7	Bmaj7	S
A	^b II7	B ^b 7	D
C	V7/III	B7	Sec.D
G	^b VI7	E ^b 7	Sm
A ^b	^b VII7	G ^b 7	Sm
B	[#] IV ^{m7} (^{b5})	Fm7 ^(b5)	T(S)
E ^b	^b II ^{maj} 7	Emaj7	Sm
D	V7/VI	F [#] 7	Sec.D

V. 例にならって、①～⑦のコードとメロディーに対応した、適切なアベイラブル・ノート・スケールとテンション・ノートの音名と度数を書きなさい。また、アボイド・ノートがある場合はアボイド・ノートの音名と度数も書きなさい。

(アボイド・ノートがない場合はNo Avoidと書きなさい。)

(例) B^b maj7 ① G7 ② Cm7 ③ F7 B^b maj7 Fm7 ④ B^b 7

⑤ E^b maj7 ⑥ A7 Dm7(b 5) G7 Cm7 ⑦ F7 B^b 6

●楽譜からアベイラブル・ノート・スケールを導き出し、五線にスケールを、またテンションとアボイドを音名と度数で書き出す問題です。Advanced II では、ノン・ダイアトニック・コードについても問われます。『セオリー・オブ・ポピュラー&ジャズ 3』第10章 (35～66ページ) の内容をよく整理して覚えておくことが大切です。

問題ではこれに基づいて、曲のキーに対する度数、さらにメロディーに含まれる音 (テンション・ノートとなり得る音) から、適切なアベイラブル・ノート・スケールおよびテンション、アボイドを判断します。特にドミナント7thコードの場合はメロディーをよく考慮して、最適なものを選択しましょう。

なお、⑤のようにメロディーから複数のスケールが可能な場合は、どちらを選んでも正解とします。

(正解)

(例) スケール: B^b イオニアン・スケール

Tension = C (9th)

Avoid = E^b (4th)

① スケール: G オルタード・スケール

Tension = A^b (b 9th) B^b ($\#$ 9th)

C $\#$ ($\#$ 11th) E^b (b 13th)

Avoid = No Avoid

② スケール: C ドリアン・スケール

Tension = D (9th) F (11th)

Avoid = A (6th)

③ スケール: F ミクソリディアン・スケール

Tension = G (9th) D (13th)

Avoid = B^b (4th)

④ スケール: B^b ミクソリディアン・スケール

Tension = C (9th) G (13th)

Avoid = E^b (4th)

⑤ スケール: A ハーモニックマイナーP5↓スケール(※またはオルタード・スケール)

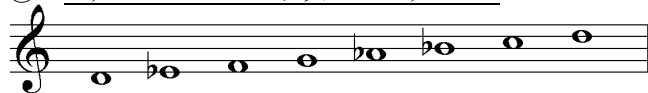


Tension = B^b(^b9th) F(^b13th)

(※C(#9th) D#(#11th))

Avoid = D(4th) (※No Avoid)

⑥ スケール: D ロクリアン・スケール



Tension = G(11th) B^b(^b13th)

Avoid = E^b(^b2nd)

⑦ スケール: F ハーモニックマイナーP5↓スケール



Tension = G^b(^b9th) D^b(^b13th)

Avoid = B^b(4th)

VI. 次の曲に対し4 Way closeでVoicingを行ないなさい。*印の箇所にはテンションを使用しなさい。また、ベース音も書きなさい。

●メロディーに対するクローズ・ボイスングです。クローズ・ボイスングは、まずメロディーの音をトップとして、その下にコード・トーンを順に配置します。テンションを使用するには、各コードのアベイラブル・ノート・スケールを考慮して付加可能なテンション・ノートを見つけます。テンションを付加した場合はその直下のコード・トーンを省略します。（主として、ルートの代わりに9thを使用するケースが多くなるでしょう。）

ドミナント7thコードのテンションは、メロディーによっては9th、^b9th等複数の候補が使用可能です。また、特殊な例として、メロディーが[#]11thから上行する場合、※印に示したように、メロディーのすぐ下の3rdを省かないボイスングも可能です（詳しくは『セオリー・オブ・ポピュラー&ジャズ 4』16ページ参照）。その他、この解答例通りに限らず、ラスト・サウンド・アタックやアプローチ・ノートのボイスングも場合に応じて使用してもよいでしょう。

以上のクローズ・ボイスングの手法については『ピアノ・パフォーマンス 4<改訂版>』第1章（6～31ページ）および『セオリー・オブ・ポピュラー&ジャズ 4』第12章I～IV（8～25ページ）に整理されています。

(解答例)

VII. 次の曲に対し、4声～5声でOpen Voicingを行ないなさい。*印の箇所にはテンションを使用しなさい。

●メロディーに対するオープン・ボイスイングです。Advanced Iと同様、シンプル・オープン・ハーモニー、Drop2、Drop3、Drop2&4あるいはスプレッド・ボイスイング等の方法を適宜組み合わせてボイスイングします。Drop2やDrop3でできた新たな2nd、3rdボイスがテンションに変更可能であれば、テンションを使用することができます。また、スプレッドのような方法では、低音から組み立てたコード・トーンとメロディーの間にテンションを追加することができます。

ロー・インターバル・リミット（低音域での音程関係）にも注意しましょう。

以上、オープン・ボイスイングのさまざまな方法や注意点については、『ピアノ・パフォーマンス 4<改訂版>』第2章（32～48ページ）および『セオリー・オブ・ポピュラー&ジャズ 4』第12章V（26～32ページ）に整理されているので、譜面上でイメージできるように練習しておくとい良いでしょう。

(解答例)